〈資料〉

2008年10月のSPD臨時党大会を傍聴して

近　藤　潤　三

本誌本号に掲載する予定で「現代ドイツにおける社会民主党の危機」の草稿を書き終えた直後、2008年10月18日にベルリンで開催されたドイツ社会民主党（SPD）の臨時党大会を傍聴する機会に恵まれた。SPDの危機に関する拙稿と直接に関連するわけではないが、補足になる面もあると思われるので、参加して気付いたことをいくつか記しておきたい。

大会の目的は2009年に予定される連邦議会選挙での首相候補とベックの後任党首を決定することにあった。実質的にはベックの退陣の時点に開かれた幹部会でこれらについては決着しているから、その決定を追認し正当化するための大会だったといえよう。その意味では政策ではなく人事問題だけの大会だったが、しかし視点を変えれば、連邦議会選挙のための選挙戦のスタートとなる点や、さらに長引く党内対立が今後どのように推移するかを占う里程標という意味を有する点で重要な位置を占めていたといえよう。

今回の党大会が開催されたのは、かつての東ベルリンにある大きなコンベンション・センターだった。SPDの党大会には過去に何度か参加したことがあるが、驚いたのは警備が厳重になっていたことである。会場の外に警察の警備車両が止まり、何人かの警官の姿が見受けられる風景はこれまでと変わりはなかった。しかし、建物に一歩足を踏み入れると、身分証明書による本人確認はもちろん、持ち物の検査などが入念に行われ、空港以上にガードが厳しくなっていた。CDUをはじめその他の政党の党大会でも以前にはこのような検査を受けた記憶がなく、指導的な政治家に簡単に近寄ることができたので、むしろ驚いたことを覚えている。改めて招請状を読み返してみると、短い文章の最後が保安上の理由で身分証明書が「無条件に必要」という注意になっていて、テロ対策に神経質になってきていることが実感として伝わってきた。連邦内務省の

推定では、ドイツにはテロ集団に属する人物が700人いるとされているから[13]、こうした過敏ともいえる措置も無理もないかもしれない。またそれと関連しているかもしれないが、以前は地方組織や党内グループが会場内のあちこちに多くのスタンドを設け、代議員に対して活発な宣伝活動をしていたが、今回はスタンドが激減しており、かなり様子が違っていたのが印象深かった。

党大会は11時に始まった。最初に演説に立ったのは、左派のリーダーで副党首を務めるナーレスだった。彼女は党首だったミュンテフェリングを2005年連邦議会選挙の直後に辞任に追いこんだ当人であり、しかもベックを左から支えた中心人物だったから、新たに党首と首相候補に予定されている二人との間に主導権をめぐる確執があり、両者に対する批判的な発言が予想された。そうした関心から演説を聴くと、ベック退陣の経緯に関する責任追及や批判的な言辞が全くなく、勇ましいはずの彼女の面目が発揮されなかったのがいささか意外であり、肩透かしをくった感じが残った。このことは、単純に考えれば、支持率低迷などに見られるSPDの危機を考慮し、一致団結を訴えることを最優先したことの表れだと見做せよう。しかしまた、いささかうがった見方をするならば、この時点では対立をこれ以上深めるのは得策ではなく、敗北の公算が大きい連邦議会選挙の後をにらみ、敗北した場合のミュンテフェリングなどの責任論で人事の一新が行われる可能性を計算に入れた結果だったと解釈することもできよう。それにしても、不本意な退陣を余儀なくされたベックの立場を視野に入れれば、彼が依存したナーレスが両者に一言も批判を浴びせなかったのは不可解とさえいえるのであり、見限ったベックを少なくとも表面上は簡単に忘れ去り、新たな党首たちとの闘争を自制する彼女の姿勢には、日頃の口調に見られる熱情とは裏腹の冷徹な権力政治家としての一面を垣間見た思いがするのである。

続いて演壇に立ったのはシュタインマイヤーだった。彼は1時間半に亘って力のこもった演説を行ったが、しばしば手元のメモに視線を落としていたのがこれまでのSPDの主要政治家と異なっていた。シュレーダーによって掘り出され、いわば縁の下の力持ちとして従来は背後から政権を支えてきたことで培わ

れた官僚風のそつのなさがそこに示されており、シュレーダーのようなメディアを通じて国民にアピールするスタイルやラフォンテーヌのように感情をむき出しにした熱弁とは趣が全く違っていた[12]。そうした相違は、主要な政策についてほぼ満遍なく言及したことや、さらに最前列に並んだ先輩政治家の功績に対する評価と謝辞の巧みさにも表れている。また自治体の主な政治家の名前を何人も挙げ、その手腕を称賛したのも几帳面な心配りを感じさせた。ただベックに関してだけは、彼が不快感のために欠席したことも手伝い、短く素っ気ない言葉で片付けたのが際立っていた。大会を報じた『フランクフルター・アルゲマイネ』紙のベテラン政治記者バナスがこれに注目し、見出しを「クルト・ベックのためにたったの一語だけ」と付けたのは当然のことといえよう[13]。

一方、政策内容の面では彼の演説は格調高く始まった。彼によれば、現下の金融危機は市場中心のグローバリズムの破産を意味し、ベルリンの壁の崩壊に匹敵する時代の画期にほかならない。そして市場主義が崩れた後の新たな時代は社会民主主義に指導する責務を課している。こうして新しい時代の劈頭に立っているという認識に基づき、代議員に対して最初に決意を新たにするように求めたのである。

しかし具体的な政策になると、格調の高さは消えうせ、概してメリハリのない平板な演説に変わったのが目に付いた。なかでも語ったことよりも語らなかったことが重要だったように感じられる。例えば内政面の最大のテーマであり、労働・社会政策をめぐる熱い争点だったハルツ改革やアジェンダ2010を言葉としては一度も使わなかったのが予想外だった。これらは各種の施策のパッケージだからひとからげに扱うのではなく個々に区分することが可能だとしても、年金、最低賃金などいくつかの政策に個別的に触れるにとどまり、関心の高い貧困問題に直結する失業手当や社会手当を素通りしたことは注目に値しよう。この点はシュレーダーの功績としてイラク戦争反対を挙げ、ハルツ改革には沈黙したこととも関連している。また、外交・安全保障では、焦眉の問題というだけでなく、担当する外相であるにもかかわらず、アフガニスタンへの連邦軍の派遣期間の延長と増強にも触れずじまいだった。深入りすれば論戦が必至で

あることを考えれば、シュタインマイヤーは意識的に論及を避けたのであり、そうしたところに、党内対立を再燃させない気配りが感じられた。またシュタインマイヤーが指物師の父と工場労働者の母の間に生まれた出自に言及し、生まれ育った家庭の周辺でアビトゥアをとったのは自分が最初だと述べて「貧しい人々」の一員であることを強調したのは、「貧しい人々の党」というSPDの原点の共有によって党内の共感を得る意図からだったと推察される[4]。

演説が終わると、拍手に包まれながらシュタインマイヤーは前列の長老・古参の政治家の席に歩み寄り、シュミット元首相、フォーゲル元党首など一人ひとりと挨拶したが、彼のボスとも呼べるシュレーダーとは抱き合い、濃密な関係を期せずして見せ付ける形になった。その後、ミュンテフェリングが演説したが、20分たらずの短いものだった。演説の中心はSPDの140年に及ぶ歴史と誇りの強調であり、「党の兵士」らしく結束を訴えるところに重点があった。また演説の調子は典型的なアジテーションであり、迫力はあっても内容は薄く、シュタインマイヤーと好対照をなしていた[5]。ただ左翼党に対する非難が目立ったことが注目点になっていた。シュタインマイヤーと同じく、ミュンテフェリングも連邦では左翼党との提携はありえないことを明言すると同時に、左翼党が掲げているのは「前々日の政策」で現実から遅れているだけでなく、人気取りのポピュリズムだと決め付けて攻撃した。彼の念頭にあったのはSPDを挑発し続けるラフォンテーヌであろうが、かつて苦楽をともにした間柄だけに激しい敵意が看取された。

ミュンテフェリングの演説では、シュタインマイヤーの場合と同様に、繰り返し引き合いに出されたのはブラントの名前であり、ブラントが現在でもSPDの団結のシンボルになっていることがあらためて印象付けられた。同時に、冒頭で挙げた拙稿でも指摘したように、党員数で見てもブラントが現職の首相だった頃が戦後のSPDの絶頂期であり、その記憶が共有されていることが証明されるかたちになった。この点は、左翼党の党首になったラフォンテーヌがブラントを精神的に継承しているのは自分であるとし、正統性を前面に押し出してSPDを揺さぶっていることからも読み取れよう。なお、首相候補と党首の投票

結果がミュンテフェリングによって演説の最後に発表された。シュタインマイヤーの得票率は95%だったから、順当な結果といえたが、ミュンテフェリングのそれは85%にとどまり、2004年に党首に選出されたときの95.1%に比べると10%も少なかった。また投票総数475のうち棄権は22で反対票が50もあった。これらの数字にはベックを退陣に追い込んだことに対する不満や不信が依然として強いことが映し出されており、前途が安泰ではないことが暗示されていた。

投票結果が発表されると会場では代議員が総立ちとなって力強い拍手が6分以上も続いた。そのため、メディアではSPDが選挙に向けて立ち直り、結束を固めたように報じられた[6]。けれども、会場内を観察した限りでは、興奮の表情やにこやかな顔は決して多くはなく、拍手が長く続いた割には冷めた空気が感じられた。あえて解釈を加えれば、不満や異論は残っていても、選挙が近づいている以上、もはや争っている余裕はなく、ミュンテフェリングとシュタインマイヤーで行く以外にないという悲壮ともいえる思いがあったのではないだろうか。拍手が静まると最後に炭鉱労組員の男声合唱団が恒例に倣い壇上でSPD幹部とともに党歌を歌ったが[7]、その頃には多数の代議員が退場して帰路についたことも冷ややかさを証明している。これらの点に照らす限り、新たな指導者にとって党内の亀裂を修復し、一丸となって選挙戦に臨むことは容易ではなく、まして高い人気を維持しているメルケルとCDU・CSUに挑んで勝利を収めることは、よほどの失点がない限りは至難だと思われる。さらに選挙で負ける場合でも、大敗を喫すればミュンテフェリングとシュタインマイヤーの政治生命すら危うくなるかもしれず、選挙戦の期間中は抑制される党内対立が再び激化する可能性も排除できない。その意味では、SPDがどのような進路をこれから歩んでいくのかはまだ固まっておらず、党大会を経てもSPDの危機は収束せず、外見上鎮火したかのように見えるだけだといわねばならないのである。

注

(1) Die Welt vom 1.11.2008.

(2) シュタインマイヤーは外相として知名度も人気も上がっているものの、長年いわば裏方を務めてきたために経歴や人となりは余り知られていない。そのことは『ターゲスシュピーゲル』紙がミュンテフェリングは省略してシュタインマイヤーについてだけ人物を紹介する大きな記事を掲載したことからも看取されよう。Hans Monath, Wer ist Frank-Walter Steinmeier, in: Der Tagesspiegel vom 19.10.2008.

(3) 因みに、同日の『フランクフルター・アルゲマイネ』紙にバナスが書いた社説はSPD大会に関する多くの報道の中では多年の経験に基づく的確な分析として傑出している。Günter Bannas, Schröders Generalstabsoffiziere, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 20.10.2008.

(4) SPD党大会の詳細を報じた『ジュートドイッチェ』紙では「指導部のもめごともアジェンダをめぐる紛糾もなかった」と指摘しているが、それはシュタインマイヤーのこうした気配りとナーレスに見られる左派の自制によるところが大きい。Susanne Höll, Plötzlich klingt es wie ein Chor, in: Süddeutsche Zeitung vom 20.10.2008.

(5) 『ベルリーナー・モルゲンポスト』紙でシュトルムが「シュタインマイヤーが真剣なステイツマンを引き受ける一方、ミュンテフェリングは攻撃部門の人物である」と指摘したのは、両者の違いを的確に言い当てている。Daniel Friedrich Sturm, Krönungsmesse in Berlin, in: Berliner Morgenpost vom 19.10.2008.

(6) 例えば10月19日付『ベルリーナー・モルゲンポスト』紙の見出しは「SPDは再生を祝う」となっている。

(7) 恒例の合唱の際にもシュタインマイヤーは歌詞を手にしていたが、演説でのメモの利用と引っ掛けて『ベルリーナー・ツァイトゥンク』紙は党大会の「最後にもシュタインマイヤーはもう一度紙切れに頼らなければならなかった」と皮肉っている。そうしたことが揶揄の対象になるか否かはともかく、彼の几帳面さの一端が窺えよう。Daniela Vates, Die SPD ist keine Holding, in: Berliner Zeitung vom 20.10.2008.